

文
芸
祭
合
同
作
品
集



ごあいさつ

けんみん文化祭ひろしま実行委員会

会長 湯崎 英彦

「けんみん文化祭ひろしま」は、本県の豊かな自然と伝統に育まれた文化の発掘、継承、育成を図るとともに、新たなひろしま文化の創造を目指し、県民の皆様の文化活動の発表、鑑賞、交流の場として毎年開催しており、今回で35回目を迎えます。

本県では、県民の皆様一人一人が、「安心」の土台と「誇り」により夢や希望へ「挑戦」することで、それぞれの欲張りなライフスタイルを実現できるよう、さまざまな取組を進めており、「けんみん文化祭ひろしま」もその一つとして魅力のある「祭」となるよう、取り組んでおります。

今年の文芸祭にも、多くの県民の皆様から八、八七八点の文芸作品を御応募いただきましたことに深く感謝申し上げます。栄えある各賞を受賞されました皆様には、心からお祝いを申し上げます。

本文芸祭が皆様の創作活動の励みとなり、一人でも多くの方々に、様々な思いを言葉に綴る楽しさを実感していただき、文芸への理解を深める契機となれば幸いです。どうか、皆様には、本県における芸術・文化の発展に、引き続きお力添えを賜りますようお願い申し上げます。ごあいさつといたします。

目次

短歌

小・中・高校生の部……………8
一般の部……………22

俳句

小・中・高校生の部……………38
一般の部……………52

現代詩

小・中・高校生の部……………68
一般の部……………104

川柳

小・中学生の部……………144
高校生・一般の部……………152

作品募集要項……………162

応募状況……………164

大会記録……………165

短
歌

選
者

堀 新 石
内 宅 原
孝 道 豊
子 和 子

小・中・高校生の部

入賞

広島県知事賞

夜更けて本を静かにひらく我気づけばいつもまだ見ぬ世界

呉市立川尻中学校二年 西尾 倫

広島県議会議長賞

藍色の母娘二代の浴衣着て涼しき風が袖を駈けゆく

県立三原高等学校一年 尾越 心美

広島県教育委員会賞

ばっちゃんのまがったこしをおしながらのぼるさかみちあせびつしよりだ

庄原市立東小学校二年 島田 悠利

けんみん文化祭ひろしま実行委員会会長賞

ほしかった本を手に入れ開くとき未知の世界がそこに広がる

広島市立船越中学校二年 朝長 風羽

広島市長賞

夏の日に汗と涙のグラウンド勝利の叫び響く青空

県立尾道北高等学校一年 松本 啓汰

広島市議会議長賞

しゆくだいをしながらとぶ蚊をうちはらいしばらく休んで計算にもどる

尾道市立向東小学校四年 杉本 陽平

広島市教育委員会賞

水泳の時間は終わり体洗うシャワーの圧力意外に強い

尾道市立向東小学校六年 鑑廣 隼汰

公益財団法人ひろしま文化振興財団理事賞

「異常気象」「最高気温」「史上初」いつものことかとチャンネル変える

呉工業高等専門学校三年 武田 康志

石原 豊子 選

特
選

夜更けて本を静かにひらく我気づけばいつもまだ見ぬ世界

呉市立川尻中学校二年 西尾 倫

【評】静かな夜の読書。いつの間にか本の中に引き込まれている作者。そのことを「いつもまだ見ぬ世界」が表現して良い。

藍色の母娘二代の浴衣着て涼しき風が袖を駈けゆく

県立三原高等学校一年 尾越 心美

【評】「藍色」の清々しいしかも「母娘二代の浴衣」の表現が良い。「涼しき風が袖を駈けゆく」に作者の喜びが表現されている。

過去偲ぶすきま風吹く祖父の家思い出詰まる空っぽの部屋

呉市立呉高等学校二年 小林 莉緒

【評】「すきま風吹く」「空っぽの部屋」の表現に生前の祖父との温かい思い出を感じさせる表現が良い。

ほしかった本を手に入れ開くとき未知の世界がそこに広がる

広島市立船越中学校二年 朝長 風羽

【評】「本を手に入れ開く時」に、作者の未知の世界への期待感、わくわく感が表現されていて良い。

雨上がり見上げた空に虹がでたきつとこれからいいことあるね

庄原市立東小学校六年 増永 紗也

【評】作者の気持ちの良く分かる歌。見上げた空に偶然に虹と出合った。それだけで何だかワクワク感が。いいことありそうなど。

気になった一冊抱え帰路につく心が躍る秋の夕暮れ

県立広島皆実高等学校三年 佐木 遙月

念願のセーラー服にそで通し心浮き立つ鏡見る朝

県立広島皆実高等学校一年 堀益 優渚

線香の匂い漂う墓地の中思い出される通夜の夜の祖母

県立三原高等学校一年 浅海 優

闇の海山からのぞく煙火は甲斐なく終わり香るさびしさ

福山暁の星女子中学校二年 栗原 千寛

マスク取る勇気があった一学期夏休み明けの不安がつのる

県立三原高等学校二年 向井 文音

双方の考え必ず揃わずに交わす議論はちよつと楽しい

呉工業高等専門学校三年 金満 二葉

ひいじいちゃんに僕の姿を見せに行く今も空から見ていてくれる

三次市立八次小学校六年 岩原 直希

夏に咲く幼き記憶思い出す特等席は母の肩車

県立尾道北高等学校一年 岡田レオナ

夕暮れに姉と比べた影法師いつになってもその丈抜かせず

呉工業高等専門学校三年 橋渡 空

逝く夏の静寂の空見上げ思う時よ私を置いてゆくなと

県立尾道北高等学校一年 藤井 梨那

こんにち行き交う人のあいさつに元氣をもらった大山登山

庄原市立東小学校五年 岩崎 薫

いつの日か未来で過去を話すとき失敗もすべて笑えるように

県立廿日市西高等学校二年 井上ひより

千羽づる平和を願い折り進める悲惨な戦争起こさぬように

庄原市立東小学校六年 佐々木潤矢

目をつむり平和の鐘を耳にして思いを込める一分間

県立広島中央特別支援学校中部二年 濱田 美遙

道歩きふと見上げれば冬の木に輝く蕾一つみつけたり

県立尾道北高等学校一年 今村 綾希

授業中白光放つ壁を見て炎暑感じた昼の数瞬

県立尾道北高等学校一年 清野 優奈

海開き大きな気持ちで向う海焼ける足跡続く道筋

呉工業高等専門学校三年 柳生 大地

青空に蝉の声響く夏の朝風鈴揺れて涼しさを呼ぶ

県立尾道北高等学校一年 森石 颯真

桜島海に浮かぶ初日の出ここえる朝に光りあふれる

呉市立呉中央中学校二年 大王みさと

夜の海少し聞こえる波の音海にうつりて見える満月

広島国際学院中学校二年 根津 泰斗

新宅 道和 選

特 選

しゆくだいをしながらとぶ蚊をうちはらいしばらく休んで計算にもどる

尾道市立向東小学校四年 杉本 陽平

【評】五月蠅い蚊をやっつける少々大げさな「うちはらい」がおもしろい。「計算にもどる」で短歌がピシリと決まっている。

水泳の時間は終わり体洗うシャワーの圧力意外に強い

尾道市立向東小学校六年 鑑廣 隼汰

【評】泳いだ後のシャワーの水圧が思いのほか強かった。これからも何気ない生活の一瞬を切り取った短歌を詠み続けてほしい。

「異常気象」「最高気温」「史上初」いつものことかとチャンネル変える

呉工業高等専門学校三年 武田 康志

【評】初句から第三句まで普通ではない気象用語。しかし異常が多usedされるとそれは異常ではなくなってくることに気づいた。

あさがおはなんじにさくのけさぼくが四じにおきたらもうさいていた

三次市立みらさか小学校一年 土井 孝弘

【評】朝顔が何時に咲くのか不思議に思い、四時に起きたらもう咲いていたということ、会話文で定型にきちんとまとめた。

水やりでもらった百円にぎりしめソフトクリームのれつにならんだ

庄原市立東小学校二年 中野 郁実

【評】ソフトクリームの列に作者も並んだ。払うお金はお手伝いをしてもらった百円玉。「にぎりしめ」が効いている。

駅伝の練習の後のユニフォーム汗くさいけどおいらの匂い

庄原市立口和中学校二年 坂村 隼斗

歩き方いつもと少し違ってるオリンピックの競歩見てから

県立三原高等学校二年 森野 未弓

身長差無視され続けてどこまでもずっと無視されるぼくのそんざい

広島国際学院中学校二年 中藤 慶心

猫見つけ後を追いかけてひっそりとそこには子猫のお家があった

呉市立呉高等学校二年 松原 花梨

寝坊してチャリぶつとばし通学路彼が見えたら安全運転

呉工業高等専門学校三年 山根 仁

一斉に家族集まり武器を取り戦闘体制どこだゴキブリ

県立三原高等学校二年 岸田聡二郎

中二女子思春期到来荒れ狂う私の心は迷走ハリケーン

福山暁の星女子中学校二年 泉川 媛夏

推し話す日本語を聞き韓国語話せる日までノートを開く

県立呉商業高等学校二年 河野 結

夏の歩道触れた素肌が恥ずかしい次会うときは長袖にする

廿日市市立廿日市中学校二年 重田 凧沙

徹夜明け動かぬ頭働かせとったノートは解読不能

呉工業高等専門学校三年 岡田 涼那

満開の夜桜見ながら立ちどまり立ちどまりして坂道のぼる

尾道市立向東小学校五年 吉原 瑠夏

暑い夏怖い話を聞いたとき心の風鈴静かに揺れる

県立三原高等学校一年 安東 優希

夏休み祖父母の家に泊まったら花火のように上がる体重

県立三原高等学校一年 弓場 椋太

文系と理系選択悩むとき君がいるから理系にしよう

県立三原高等学校一年 原 拓海

なつの川ニジマスとってやいてたべたいのちにかんしゃのこさずたべた

庄原市立東小学校二年 宮田 秀朔

朝ねぼうラジオ体そう間に合わず目覚まし時計ふたつに増やす

庄原市立東小学校六年 山本 滯月

試合中「絶対勝つ」と口では言うが心の中では今日もダメかも

庄原市立口和中学校二年 居原 晄汰

友達と遊園地行く夏休み回しまくったコーヒーカーップ

県立三原高等学校二年 玉那覇大葵

ばっちゃんのまがったこしをおしながらのぼるさかみちあせびつしよりだ

庄原市立東小学校二年 島田 悠利

休み前自転車事故で頭打ち何もできずに半分終わる

県立三原高等学校一年 田尾 龍誠

堀内 孝子 選

特
選

夏の日に汗と涙のグラウンド勝利の叫び響く青空

県立尾道北高等学校一年 松本 啓汰

【評】 猛暑日が続いたこの夏、目標に向かって毎日練習を続けた。大会が勝利したみんなの喜びと希望が感じられる。

ばっちゃんのまがったこしをおしながらのぼるさかみちあせびっしよりだ

庄原市立東小学校二年 島田 悠利

【評】 今年の夏は特に暑かった。曲がったおばあちゃんの腰を押しながら坂道を登るやさしい気持ちりが伝わってくる。

あの一本決めきれなかったくやしさがコートに立つとまたよみがえる

大竹市立玖波中学校二年 古村 楓

【評】 テニスの大会でしょうか。悔しい思いが読者に伝わってくる。悔しさをばねに頑張る希望が見えてくる。

「ごめんね」とぼつりと囁く君の声頬を濡らすは日暮れの時雨

呉工業高等専門学校三年 大木 梨愛

【評】君の顔がぬれているのは、時雨ではなく涙かもしれない。素直な心で見つめる作者の思いが感じられる。

ほしかった本を手に入れ開くとき未知の世界がそこに広がる

広島市立船越中学校二年 朝長 風羽

【評】本を読むことで新たな知識が増えてくる。本を読む喜び、楽しさが伝わり静かな様子が浮かんでくる。

念願のセーラー服にそで通し心浮き立つ鏡見る朝

県立広島皆実高等学校一年 堀益 優渚

なつやさいろいろでないでかわいいなわたしのすきなサラダになあれ

庄原市立東小学校二年 栗原 那奈

春の日に新たな命燕の巣まだたよりない小さな翼

呉市立呉中央中学校二年 占部 結大

夕暮れに染まる尾道坂の街瀬戸内海も光を宿す

県立尾道北高等学校一年 松並 暖士

おじょう土のじいじに手紙とどくかな会館前のゆう便ポスト

廿日市市立大野東小学校五年 袋瀬ほのみ

星月夜無数の星が道照らすまるで未来に導くように

県立尾道北高等学校一年 戸田 愛蘭

通学時電車から見る青海原陽光浴びて輝くごとし

県立尾道北高等学校一年 鈴木和佳奈

虹の下あじさい並ぶ帰り道花の先には光る水玉

三次市立布野中学校二年 小田 直幸

藍色の母娘二代の浴衣着て涼しき風が袖を駆けゆく

県立三原高等学校一年 尾越 心美

畑仕事母の背中に降り注ぐ天空海闊輝く緑

県立三原高等学校二年 山入端彩華

全身をねじらせ酸素使い切りゴーグル越しに見る青い空

広島市立安佐中学校二年 鈴木 里彩

目開けば笑う人あり耳聞けば話し声ある家のあたたかさ

比治山女子中学校二年 岸本 愛亮

赤クレヨンまた新しくなるほかの色はときには長くときには短かく

三次市立八次小学校五年 前田 大翔

お祭りだワクワクするな楽しみだきんさい祭りうれしい気持ち

三次市立八次小学校三年 清川 柚乃

ピンク色ドックにそびゆる巨大船二度と帰らぬ呉の港に

呉工業高等専門学校三年 佐々木慎介

オーブンカーポカポカ南風を肩にのせリズム刻んでエンジンふかす

県立尾道北高等学校一年 大村 凌平

ふんわりと泳ぐクラゲは暗闇で明るく光る海の宝石

呉市立呉高等学校二年 柳迫 梨愛

カエルがね親子で鳴くよゲコゲコと親子なかよく歌っているよ

三次市立八次小学校四年 中村 駿寿

海開き肌色光る夏の日揺れる陽炎麦わら帽子

呉市立呉高等学校二年 八谷 葵

線香の匂い漂う墓地の中思い出される通夜の夜の祖母

県立三原高等学校一年 浅海 優

一般の部

入賞

広島県知事賞

猛暑日のひかりをまとひ勇ましく吾子をはじめて海へ踏みこむ

広島市 熊谷 純

広島県議会議長賞

そびえ立つ高炉はもはや錆おりしされど誇るがに夕陽に染まる

呉市 中島 義夫

広島県教育委員会賞

路地裏に藁の匂ひの蘇る被爆に耐へし人家を解けば

広島市 永井 勝弘

けんみん文化祭ひろしま実行委員会会長賞

見えぬ目で撫でつつ進む探し物当たりて握る夫の手強つまく

広島市 石原千代子

広島市長賞

茜雲見上ぐ窓辺に小さな灯明日は手術日ひとり佇む

広島市 山田 雅子

広島市議会議長賞

夕暮れのカフェに子らと笑みながら妻の余命はわれのみが知る

尾道市 川口 靖文

広島市教育委員会賞

不意に來し静寂が不安かきたてるただ扇風機が停止しただけ

広島市 岡田 寿子

公益財団法人ひろしま文化振興財団理事賞

風そよぐ二十戸数のわが村に男の子の生れし鯉幟たつ

広島市 田中 博子

石原 豊子 選

特 選

そびえ立つ高炉はもはや錆おりしされど誇るがに夕陽に染まる

呉市 中島 義夫

【評】「そびえ立つ高炉」はどこか。島根県の「たたら製鉄」と想像した。下の句に作者の高炉への思いが表現されているのが良い。

祖父の背に語られぬままの戦後史を原爆ドームは静かに見守る

広島市 箭田 儀一

【評】語られぬほどの強い衝撃を受けた祖父。その思いを想像できる作者の気持ち「原爆ドーム」と重なる結句が良い。

夕暮れのカフェに子らと笑みながら妻の余命はわれのみが知る

尾道市 川口 靖文

【評】上の句の温かさと下の句の作者の苦しみの対比が鮮明である。子ら
を思う気持ちと妻を思いやる心が痛々しい。

茜雲見上ぐ窓辺に小さな灯明日は手術日ひとり佇む

広島市 山田 雅子

【評】 作者は病室から見える茜雲。家々の小さな灯。それだけでも寂しさが漂うのに、明日は手術日。やるせない寂しさが伝わる。

モノトーンの長き時越え産まれくる初孫の青春に弾ける

庄原市 古家八千代

【評】 上の句の「モノトーンの長き時越え」の表現が素晴らしい。初孫の誕生を心待ちしていた気持ちが強くなった。

大戦の疎開者数多養いき厨の母の包丁の音

世羅郡世羅町 石原 恭子

母の日や墓の前にて語ることに八十路過ぎしも慣例となり

広島市 寺本 恵風

四年ぶりの峡のふるさと校舎より聞こえきし校歌に歩を止めて和す

尾道市 仲尾 修

朝の陽に大地が呼吸始めたり水蒸気白く畑よりのぼる

三原市 小白 照子

銀舍利と呼ばれしことも死語となり休耕田に雉が鳴くなり

三次市 岡崎 明治

虫たちも生きづらからんこの猛暑花に水撒けばバツタら寄り来

広島市 木戸 博恵

逝く義母の珊瑚の念珠継ぐ孫よヒロシマ想う縁とぞせん

広島市 末田 敦子

見えぬ目で撫でつつ進む探し物当たりて握る夫の手強く

広島市 石原千代子

幾万の時計の針をとめたろう広島がヒロシマになった日

尾道市 久保 ヒデ

「まちんと」を心ひとつに唱いたり原子爆弾使わぬ世界を

庄原市 安川 博子

真つ新の麦わら帽子買い揃え孫の声待ち夏ふとん干す

尾道市 砂田 達成

夏休み子らの声無き公園に我れ一人居てセミの声聴く

広島市 村尾 和

戦争の終りはいつとヒロシマで「平和のポスト」に問う十二歳

廿日市市 金子貴佐子

苔寺のみどりの苔に娑羅の花一日花落つ大き白花

広島市 山本 憲治

遠き日に君と歩みし野の道に吾亦紅咲くかすかにゆれて

福山市 林 スミ子

路地裏に藁の匂ひの蘇る被爆に耐へし人家を解けば

広島市 永井 勝弘

役者絵の写楽の眼まなこのひとにらみ外国人とらくにびとに媚は売らぬと

広島市 岩本 幸久

子ら歌ふ「ひろしま平和の歌」聞こゆ今朝全開の校舎の窓より

広島市 大多和 義

不揃いの足で踏ん張る茄子の牛魂棚の上出番待つがに

三次市 林 勝子

「を」の一字置き替えながら詠まんとす傘寿くる身に湧くときめきを

呉市 河崎 典子

新宅 道和 選

特
選

猛暑日のひかりをまとひ勇ましく吾子をはじめて海へ踏みこむ

広島市 熊谷 純

【評】「勇ましく」がほほえましい。「ひかりをまとひ」はオーバーだが、そのことで子どもへの愛情がよく伝わる。

うめくごと泣くを携帯に聞きしのみ酸素マスクに声ふさがれて

福山市 若林美知恵

【評】入院中の人の声は酸素マスクに遮られ「うめくごと」聞こえた。病名は分からないが、いたたまれない短歌。

不意に來し静寂が不安かきたてるただ扇風機が停止しただけ

広島市 岡田 寿子

【評】回っているときは音の気にならない扇風機。止まって静かになり違和感を持った。あるあるの経験を巧みに詠んだ。

路地裏に藁の匂ひの蘇る被爆に耐へし人家を解けば

広島市 永井 勝弘

【評】被爆したものの焼け残った藁葺きの家の解体現場。その情景が映像のみならず嗅覚までも感じさせる短歌。

白猫の鼾聞きつつ添い寝する横に広がる孤独死の紙面

広島市 斉藤 恵子

【評】独り暮らしの作者の横で白猫は安心して鼾までかいている。新聞には孤独死の記事が。静止画ではなく動画的な短歌。

そびえ立つ高炉はもはや錆おりしされど誇るがに夕陽に染まる

呉市 中島 義夫

世の中についてゆけないわからないオワコン・タイパ・サブスクなどの

広島市 小坂 修

蟬の穴を数え草取るとり進むどう生きるかは間に合わずとも

庄原市 奥井 久子

カープ戦タイガース相手に0対0延長聞きつつケトルを磨く

広島市 長尾 裕子

過去よりも未来を語り合ふ君に日傘差し掛け炎天をゆく

三原市 新谷 眞子

知りたきは医の死生観ゆつくりと酒酌み交わし語りたき夜

広島市 越智 隆義

あかつきの光さしくる製鉄所呉の跡地に静かに赤く

広島市 加土 道子

とび越えし柵の高さは二メートル長女夫婦は鹿害嘆く

呉市 古谷 明子

戦争の終りはいつとヒロシマで「平和のポスト」に問う十二歳

廿日市市 金子貴佐子

ガン細胞首の骨まで転移して「殺してくれ」と叫ぶ夫が

広島市 梶田 董子

シヨパン弾くフジコ・ヘミング視つつ思う老いることは自由になること

三次市 堂本 明美

朝の陽に大地が呼吸始めたり水蒸気白く畑よりのぼる

三原市 小白 照子

やっさ祭り夜を焦せる踊り手のヤッサヤッサと町に飴す

三原市 矢原ミユキ

虫たちも生きづらからんこの猛暑花に水撒けばバツタら寄り来

広島市 木戸 博恵

子ら歌ふ「ひろしま平和の歌」聞こゆ今朝全開の校舎の窓より

広島市 大多和 義

とりどりに流す灯笼揺らめいて祈りの声が水面に広がる

広島市 大江 達美

忘れてた夏の思い出取り出して季節外れの花火楽しむ

大竹市 藤野真由美

パワハラと言う言葉無き世を生きて辛抱せよと親に諭され

三次市 林 章子

入院の父に代わって水回り向きに迷える水口の石

安芸郡府中町 石橋 康徳

ふるさとを箱いっぱい詰めて込んで娘に送る海とレモンと

広島市 倉橋 香織

堀内 孝子 選

特選

南無阿弥陀仏晩年の身に眩くもさびしらにして見えがたき道

広島市 三浦 恭子

【評】南無阿弥陀仏と眩いてみても、老いたこの身に仏の道は見えない。遠く聖らかな界は測り難い、という作者の気持ちしが伝わる。

猛暑日のひかりをまとひ勇ましく吾子をはじめて海へ踏みこむ

広島市 熊谷 純

【評】長い猛暑日が続いたこの夏。初めて海に入った子供さんを見守る、作者のあたたかなまなざしが感じられる。

傷ついた兵士笑顔で入場す。パラリンピック平和願いて

三次市 山本 圭子

【評】いまだに続いている戦争。傷ついた戦士もパラリンピックに笑顔で入場した。平和を願う思いが伝わってくる。

見えぬ目で撫でつつ進む探し物当たりて握る夫の手強く

広島市 石原千代子

【評】目が見えず、手探りで探し物をしている作者。ご主人の手に触れ
しつかり握った。夫婦の絆が感じられる。

風そよぐ二十戸数のわが村に男の子の生れし鯉幟たつ

広島市 田中 博子

【評】子供の減少傾向にある日本。僅か二十戸数の村に男の子が誕生し
た。家族や地域で喜ぶ姿が浮かんでくる。

入 選

穫りわずかな田畑耕やし九人の子育てし姑の冷えゆく手握る

山県郡安芸太田町

岩本美智子

カーブ戦タイガース相手に0対0延長聞きつつケトルを磨く

広島市

長尾 裕子

大戦の疎開者数多養いき厨の母の包丁の音

世羅郡世羅町

石原 恭子

ふるさとを箱いっぱい詰めて込んで娘に送る海とレモンと

広島市

倉橋 香織

路地裏に藁の匂ひの蘇る被爆に耐へし人家を解けば

広島市

永井 勝弘

はつ夏の空を映したテーブルに焼きたてのパンを並べる朝

広島市

坂井 美貴

息子のくれし防災グッズの銀の笛救命の音の高高と澄む

福山市

高橋千恵子

シヨパン弾くフジコ・ヘミング視つつ思う老いることは自由になること

三次市

堂本 明美

茜雲見上ぐ窓辺に小さな灯明日は手術日ひとり佇む

広島市

山田 雅子

そびえ立つ高炉はもはや錆おりしされど誇るかに夕陽に染まる

呉市

中島 義夫

夕暮れのカフェに子らと笑みながら妻の余命はわれのみが知る

尾道市 川口 靖文

山間にすすきの目立つ荒れ棚田打ち捨てられし限界集落

広島市 三谷 俊明

戦争の終りはいつとヒロシマで「平和のポスト」に問う十二歳

廿日市市 金子貴佐子

澄みきつた秋空仰ぐ またあおげば九十六歳走りたくなる

尾道市 藤田 久美

まだ出来るきつと出来ると鼓舞しても足の衰え日に日に分かる

広島市 西岡 昌子

祖父の背に語られぬままの戦後史を原爆ドームは静かに見守る

広島市 箭田 儀一

過去よりも未来を語り合ふ君に日傘差し掛け炎天をゆく

三原市 新谷 眞子

初出荷皆で育てたじゃが芋は体にやさしい自然農法

山県郡北広島町 出本 恵子

子ら歌ふ「ひろしま平和の歌」聞こゆ今朝全開の校舎の窓より

広島市 大多和 義

四年ぶりの峡のふるさと校舎より聞こえきし校歌に歩を止めて和す

尾道市 仲尾 修

俳句

選者

大 川 上 充
大 川 崎 良 益 太 郎 子
子 良 子

小・中・高校生の部

入賞

広島県知事賞

初桜新たな扉切り開く

福山市立幸千中学校三年 高橋 慶志

広島県議会議長賞

ハンカチを渡した君は勝ち笑顔

呉市立呉高等学校三年 岩畔 奈津

広島県教育委員会賞

風光る少しつぶれた目玉焼き

県立尾道北高等学校一年 北口 美結

けんみん文化祭ひろしま実行委員会会長賞

亡き祖父がまぶたに浮かぶところてん

庄原市立庄原中学校三年 近藤 美緒

広島市長賞

父の日に花束ではなくお酒をね

府中町立府中小学校六年 鳥井菜々花

広島市議会議長賞

打ち水があつという間に消えてゆく

福山暁の星小学校五年 小川凜太郎

広島市教育委員会賞

そらまめはわたのふとんでならんてた

府中町立府中中央小学校二年 岸本 大輝

公益財団法人ひろしま文化振興財団理事長賞

麦の秋麺類増える米不足

福山暁の星小学校五年 加藤 凜郁

大上 充子 選

特
選

そらまめはわたのふとんでならんでた

府中町立府中央小学校二年 岸本 大輝

【評】そらまめのさやをむいたときのかんどうと、しっかりものをかさ
つしているようすがよくでています。

別れ告ぐ古い校舎と散る桜

福山市立誠之中学校三年 山内 稟花

【評】卒業していくちよつと淋しい感情と古い学び舎に感謝している気持
ちを上手に表わしている。季語が効いている。

祖母の手を引く側となり初詣

呉市立郷原中学校三年 山本 晴輝

【評】幼い頃は祖母に手を引かれての初詣。今は反対に祖母を守ってあげ
ようという作者のやさしさが出ている作品。

初桜新たな扉切り開く

福山市立幸千中学校三年 高橋 慶志

【評】 ようやく咲き出した桜。作者に嬉しさと新しい希望が湧いて来た。中七の具象が意志の強さを表わしている。

風光る少しつづれた目玉焼き

県立尾道北高等学校一年 北口 美結

【評】 冬が過ぎて暖かくなる頃のきらきら輝く風。つづれた目玉焼きも何となく楽しく笑えるのも春の訪れを喜ぶ心の表れ。

入 選

七夕のささのきり口いい香り

庄原市立総領小学校五年 平山 暖人

ねる前のすず虫の声子守歌

廿日市市立佐方小学校五年 内田 瑛良

にじが出て暗い気分も晴れ晴れと

廿日市市立佐方小学校五年 車 昌悟

笑い声セミに負けない三姉弟

福山暁の星小学校五年 奥野 瑚子

こいのぼり風を仲間に行っているよ

大竹市立大竹小学校六年 佐々木陽真

ふうりんて風で作ろう音作ろ

坂町立横浜小学校三年 池田 風

ヒマワリは太陽の仮身真黄色

坂町立横浜小学校六年 宮崎 寛大

亡き祖父がまぶたに浮かぶところてん

庄原市立庄原中学校三年 近藤 美緒

せみの声色褪せていく時間かな

福山市立幸千中学校三年 竹縄 一煌

うたた寝の耳にコオロギ聞こえる

三次市立八次中学校三年 小野美紗貴

ベランダに一人ポツンと星涼し

福山市立幸千中学校三年 祝 歩花

わたあめと雲を重ねた夏の果

広島国際学院中学校三年 村上 絢音

イーゼルの冷えた教室筆にぎる

県立広島皆実高等学校一年 前田 美悠

膝の上香箱座りかじけ猫

県立尾道北高等学校一年 竹丸 未菜

袴着て暑さと戦い弓を引く

呉市立呉高等学校三年 松井 遥菜

夏が来る愛犬の毛が刈られてく

呉市立呉高等学校二年 江川 瑠那

的見つめ一射集中セミの声

呉市立呉高等学校二年 酒井 莉子

流星願いを言えず次を待つ

呉市立呉高等学校二年 中井 彩葉

部活動汗の分だけ強くなる

県立三原高等学校一年 加村 太獅

陽炎の立つグラウンドに我立ちぬ

県立三原高等学校二年 山本 大聖

川崎益太郎 選

特選

麦の秋麵類増える米不足

福山暁の星小学校五年 加藤 凜郁

【評】令和の米騒動と言われる社会現象を、「麦の秋」という季語を使い、巧みに表現した、心憎い句である。

雨と傘永遠に仲良くできぬ

庄原市立比和中学校二年 垣内 優希

【評】雨と傘、付き物なのに仲良くできない関係という捉え方に感心した。裏で、喧嘩ばかりしている両親も、本当は愛し合っていると信じたいという子どもらしい願望も読める句である。

あああああああああああ暑すぎる

広島市立己斐小学校六年 吉田 篤史

【評】〈あ〉だけで、十二音使った斬新な句。季語も〈あ〉で韻を踏んだ、俳諧味溢れる句に仕上げた技量に脱帽の句。

ハンカチを渡した君は勝ち笑顔

呉市立呉高等学校三年 岩畔 奈津

【評】ハンカチを差し出した貴方は、勝ち組の顔をしているという句だが、スポーツ、恋愛等、読みが広がる一句である。

あじさいがぱつと笑った気がしたよ

廿日市市立佐方小学校五年 堀江 楓乃

【評】あじさいが咲いているのを見て、笑ったように感じたという句である。作者の明るい感性に感心した。

あせくだるはだの迷路をわたりゆく

廿日市市立佐方小学校六年 菅 湊音

あの日見た向日葵まるで笑う君

呉市立呉高等学校二年 井上 真緒

初桜新たな扉切り開く

福山市立幸千中学校三年 高橋 慶志

さくらんぼ二人の秘密恋心

呉市立川尻中学校三年 福井 蓮紀

受験期に進まぬ課題手にスマホ

呉市立呉高等学校三年 中村 美友

夏休み机とデートは最終日

庄原市立東小学校四年 大久保 朔

カブト虫いつか死んじゃうかなしいよ

廿日市市立佐方小学校四年 岩本 泰貴

賑わいと哀愁ただよう蝉時雨

県立三原高等学校一年 藤野 心愛

桜舞う別れと出会い始まりだ

府中町立府中小学校五年 利元 晴皇

散る花火見ている君に恋をする

県立三原高等学校一年 山中 大成

青蛙雨粒飾りいきいきと

県立尾道北高等学校一年 中川紗百合

うろこ雲悔しさ滲む弓の影

県立広島皆実高等学校二年 吉川 咲希

なやむよね葉っぱ食べるか桜餅

福山市立誠之中学校三年 佐野 光咲

亡き祖父がまぶたに浮かぶところてん

庄原市立庄原中学校三年 近藤 美緒

父の日に花束ではなくお酒をね

府中町立府中小学校六年 鳥井菜々花

本心を打ち明けられず夏終る

広島市立船越中学校三年 大谷 宙夢

母嘆くあまりの暑さ電気代

比治山女子中学校二年 西本 桃杏

うつくしきもみじかつ散る銀閣寺

広島国際学院中学校三年 日谷 咲希

ヒガンバナあなたに届けこの思い

福山市立幸千中学校三年 藤井 駿

蟻地獄逃がられないクレーター

県立三原高等学校一年 谷川 奏太

広川 良子 選

特選

打ち水があつという間に消えてゆく

福山暁の星小学校五年 小川凜太郎

【評】暑さを鎮めるための打ち水だが、それがあつという間に消えてしまった。計り知れない暑さを見事にとらえた。

弟の初挑戦はラムネ飲む

県立三原高等学校一年 宗近 暁仁

【評】初めてラムネを飲んだ弟のくしゃくしゃの顔がうかぶ。ちよつと心配しながらも、やさしく見守っている。

雲一つ無い青空に白い蝶

三次市立八次中学校三年 丸岡ひまり

【評】俳句の基本。天と地をよく見て自然を詠みとった。見渡す限りの青空が白い蝶の行方を応援しているのだ。

香り立つ甘いトマトと祖父の顔

呉市立川尻中学校三年 田原 暖

【評】祖父の畑でとれた新鮮なトマトの香りに、ふと育ててくれた祖父の顔が浮かんだ。感謝の心でもある。

夏の海終わりを知らぬ波の音

県立呉商業高等学校三年 船越倫太郎

【評】当然といえば当然であるが、その自然の摂理を浜辺で詩的に感動でとらえた。

入 選

砂日傘二足の靴の見張り役

呉工業高等専門学校三年 岩部 想

風光る少しつぶれた目玉焼き

県立尾道北高等学校一年 北口 美結

カブトムシまだ小さいよせいちようしてね

海田町立海田小学校三年 三井 昊

汗光る自転車通学二十分

県立三原高等学校一年 白須 彩葉

早起きが集まるホーム跳ぶかえる

県立尾道北高等学校一年 若木 爽香

夏近し大の字で寝るなまけもの

呉市立川尻中学校三年 松林 那奈

音と汗風のいたずら音楽室

福山市立幸千中学校三年 筒井るりか

くつきりと浮かぶ日焼の誇らしく

呉工業高等専門学校三年 武田 康志

祖母の家みんな集合益休み

呉市立呉高等学校二年 丹下 歌恋

せみないて友達の声きこえない

坂町立横浜小学校六年 陳 とう

雨音に鳴いてあらがう雨蛙

呉市立呉高等学校二年 山下璃亜奈

ハンカチを渡した君は勝ち笑顔

呉市立呉高等学校三年 岩畔 奈津

夏の空雲ひとつなく光さす

海田町立海田小学校四年 勝田 亜未

北風で紙ひこうきがとんでゆく

海田町立海田小学校五年 奥田 亮成

夕焼けに皆で流した大涙

呉市立呉高等学校三年 上村 優菜

更衣室夏の匂いがつまってる

県立三原高等学校二年 柏 美空

カーネーション母にあげたら笑顔かな

府中町立府中小学校六年 浦井 惺成

カタツムリののろあるくのんびりや

府中町立府中小学校四年 近藤 暖真

母の日に感しゃを伝えはぐをする

大竹市立大竹小学校五年 坂本 歩

父の日に花束ではなくお酒をね

府中町立府中小学校六年 鳥井菜々花

一般の部

入賞

広島県知事賞

抱き上げて童にふつと母の香

福山市 瀬尾ちとみ

広島県議会議長賞

借景に城を絡めて薔薇祭

福山市 浜本 直子

広島県教育委員会賞

あいまいな相槌を打つ古団扇

福山市 栗本 リカ

けんみん文化祭ひろしま実行委員会会長賞

叱られし子の水切りや風光る

福山市 池田 律子

広島市長賞

花火屑拾ふ朝の浜辺かな

広島市 吉田紀久子

広島市議会議長賞

安産の札や牛舎に初燕

広島市 森本 弘子

広島市教育委員会賞

冬めくや駄菓子のごとく菓受く

広島市 永宗 啓司

公益財団法人ひろしま文化振興財団理事長賞

百回は来たきと待つ子海開

福山市 池上 幸子

大上 充子 選

特選

安産の札や牛舎に初燕

広島市 森本 弘子

【評】牛舎に安産の札を貼って出産を待ちわびている酪農家のやさしい気が伝わってくる。初燕が嬉しい。

蟬時雨框に憩ふ野良^の良着^の父母

広島市 末田 敦子

【評】上り框のある昔ながらの農家の生活。忙しい中での休憩の様子が、野良着のまゝと素直に描かれている。

をりからの雨に解けし踊の輪

福山市 折田耕四郎

【評】待ちに待った盆踊。空模様を気にしていたが、とうとう降り出した。中七の具象が良く出来て臨場感がある。

師の葬送茅花流しの風の中

廿日市市 辻 惠風

【評】 尊敬して止まない恩師の葬に参列した哀しさとこれまでの感謝を込めて静かに見送った。茅花流しが切ない。

うたた寝のいつしか掛けてある毛布

呉市 手納 正康

【評】 ちょっと横になっただけの間にか眠ってしまった。目覚めた時の様子と、家族のやさしさが伝わってくる佳句。

入
選

被災地に蛍の夜の戻り来し

福山市 高橋 泰子

瀧音に五感目覚むる心地して

広島市 徳毛 佳美

抱き上げて童にふつと苺の香

福山市 瀬尾ちとみ

あいまいな相槌を打つ古団扇

福山市 栗本 リカ

ユーカーリの蹴けるさまに広島忌

広島市 森藤 千鶴

夕立やぶ濡れ走る反抗期

山県郡安芸太田町 浅田 洋子

放棄地に肩組む案山子残されし

尾道市 川口 靖文

挽ぎたての西瓜ぶらさげ友見舞ふ

広島市 天王 省治

手繰り寄す夢を編み込みみ毛糸玉

広島市 高木あい子

伏す母にただ絶えまなく団扇風

広島市 藤井知壽子

バス停に男もすなる日傘かな

広島市 小倉 伸也

叱られし子の水切りや風光る

福山市 池田 律子

借景に城を絡めて薔薇祭

福山市 浜本 直子

庭下駄の向きちぐはぐに時雨けり

廿日市市 斎藤 文子

花火屑拾ふ朝の浜辺かな

広島市 吉田紀久子

帰る子と黙つて歩く土用浪

福山市 津田 和敏

木場跡に潮のにはひや鳥渡る

広島市 藤谷 知子

念入りにフルート磨き卒業す

広島市 下田あつ子

クリムトの絵の妖光や瑠璃蜥蜴

呉市 植田トモ子

港町日焼け男の撥搦き

広島市 荻野りつ子

川崎益太郎 選

特選

冬めくや駄菓子のごとく菓受く

広島市 永宗 啓司

【評】毎日同じ菓を飲んでいると、貴重な菓も、駄菓子のようだと、まさに俳諧味あふれる句で、言われて納得の句である。

動物も日傘で歩く日も近い

広島市 井上 与作

【評】異常な暑さが続き、男の日傘も珍しくなくなった。愛犬に日傘を着ける人も出てくるに違いない。大胆な予言の句。

来るや来る度し難きもの八月来

広島市 下末かよ子

【評】八月は毎年来るが、八月に対する思いは、人それぞれで、どのよう
に迎え、どう行動するか悩ましい。真面目な句。

夜と霧時を経てなほ晴れぬ朝

広島市 篠田 榮子

【評】有名な「夜と霧」の小説を踏まえて、先の見えない世の中を憂いた句。小説の題名を季語として使った巧みな句。

籐寝椅子家風家訓のなきくらし

安芸郡府中町 大久保信子

【評】籐寝椅子は、自由きままな休息椅子である。家風家訓とは無縁である。俳諧味あふれる句となった。

入 選

唐突に孫よりもらふお年玉

府中市 大石 一江

傘干して私を干して梅雨晴間

広島市 羽城 裕子

薔薇の束黙つておいて行きし吾子

広島市 国本 和子

老いの身を奮ひ立たせる暑さかな

東広島市 山田美佐子

節分に産声高く鬼逃げる

三原市 石口 晃択

老いてなほ俳句指折り紅芙蓉

福山市 名取美佐子

浦島ぢゃと擲揄され久し帰省の子

呉市 藤本 卓水

摘まれたい摘まれたくない水中花

広島市 橘 しのぶ

全集も二束三文秋の暮

広島市 松尾 信彦

朝顔は夕日照らして口閉じる

福山市 酒井日出夫

孫談議そつと離れて菜虫とる

東広島市 宮田 勲

遠花火区切りいづくぞ余生とは

府中市 山口 道子

今を生く母の青春終戦忌

福山市 檜崎喜美枝

初秋や高齢者宛封書の来

山県郡安芸太田町 河野由美子

特攻の達筆の遺書敗戦忌

広島市 池田 萩邨

反抗は向上心よ青嵐

広島市 村本クニ子

少年の決意むくむく雲の峰

三次市 渡里トモ枝

秋灯を数え故郷の過疎を知る

三次市 林 敏明

死の床に鳴いて寄り添ふ秋の蟬

廿日市市 廣田 厚子

さくらんぼえくぼのような顔をよせ

安芸郡府中町 南口 勝

広川 良子 選

特
選

百回は来たきと待つ子海開

福山市 池上 幸子

【評】待ち遠しかった海開。元氣な子供の武者ぶるいして待っている様子。百回とは大袈裟だがそれほど海の好きなお子。

床の間に二人の太郎子供の日

広島市 小林 盈

【評】子供の日、二人の男児の生長を願って飾られた武具や五月人形に、二人の太郎とはめでたくもよろこばしい。

日と風にミストとなれる滝しぶき

福山市 嶋山 洋子

【評】高所から落ちてくる滝しぶきを現代的にミストと捉えた。七色にかがやく虹色。瞬間を見逃さなかった俳句の眼。

こぼれたる白のうつろひさるすべり

安芸郡府中町 石橋 康徳

【評】的確な写生。枝先では眩く真白に揺れていたさるすべり。散つてわずかづつ白色の衰えてゆく様子が妙。

海峡の花火次々海に消え

尾道市 小畑 宣之

【評】海を染め打ち上った海峡の花火。又その花火が海に消えた。当然といえは当然。しかしその着眼点を称えよう。

入
選

抱き上げて童にふつと母の香

福山市 瀬尾ちとみ

広げたる祝詞の染みや山開

福山市 林 万理子

人集り大蛇を首に巻きつけて

広島市 川近 輝子

背負はれて媪出水を逃れをり

福山市 渡辺 素子

観音の思惟の指の秋思かな

尾道市 砂田 千春

籐寝椅子家風家訓のなきくらし

安芸郡府中町 大久保信子

学童のハイタツチ待つ立葵

福山市 竹村 丙喜

借景に城を絡めて薔薇祭

福山市 浜本 直子

虹消えて原爆ドーム残りけり

福山市 田村祐巳子

夏空にパリの風吹く日章旗

東広島市 腰本 直山

一雨の欲しき極暑に負けてをり

福山市 貝原 玲子

軍手の子魚つかみ取る夏祭

豊田郡大崎上島町 底押 悦子

叱られし子の水切りや風光る

福山市 池田 律子

ふる里へ二つ山越え萩の花

広島市 松本壽賀子

バス停の手話の笑顔やあたたかし

呉市 上野 芳江

春雷の突と一喝午前四時

福山市 濱田喜代恵

夫婦岩野分の波も動じざる

福山市 戸原 澄清

あいまいな相槌を打つ古団扇

福山市 栗本 リカ

花火屑拾ふ朝の浜辺かな

広島市 吉田紀久子

紙漉きのなごりの水車河鹿鳴く

福山市 内田 千年

現代詩

選
者

万 橋 北
亀 村
佳 し
子 の 均

小・中・高校生の部

入賞

広島県知事賞

知ることの意味

呉市立蒲刈小学校六年 井上 和波

白い砂浜がすきとおる空の青に続く
キラキラ光る波
エメラルドグリーンの海

赤に黄

青に緑に黄

サンゴや熱帯魚

色とりどりの生き物たち
どこまでも 一匹一匹 一つ一つが
はつきり 見える

風でゆれるフクギの木
色あざやかなハイビスカス

夕焼けの海に沈む太陽
沖繩の自然は：

七十九年前

この自然の中で
何千何万の人の命が
失われたことを知った
たくさんの命が失われたことを
ぼくは 気づかなかった

自然の美しさは
平和の大切さを
命の尊さを
訴えていたんだ

自然の美しさにみせられて
自然のすばらしさに 心ひかれて
気づかなかった たくさんの悲しみ

「平和の礎」

刻まれた尊い命が
静かに 力強く
ぼくに語りかける

歴史を知ることの意味を
教えているんだ

現 代 詩 部 門

広島県議会議長賞

雨

雨がふると
雨のにおいがする
しめったにおい
くもりのにおい
ちよつとワクワクするにおい
においがしないくらいのおい
ザンザンぶりになったら
びしょびしょになりたくて
私はブランコをこぐ
服がもう水を吸えなくなるまで
雨を楽しんだら
家に帰って
ざぶんとお湯に満たされる
雨を全部流すと
ふいに
雨のにおいがする

県立広島中学校二年 三宅美葡子

現 代 詩 部 門

広島県教育委員会賞

決意

県立広島皆実高等学校三年 荒田川咲季

夏の日の夕方

自転車を漕いでいた

遠くで陽炎がゆらゆらと揺れている

信号が赤になりわたしはため息をついた

ペダルを止めるのは面倒臭い

赤という色を見るだけで暑さが増す

わたしは木陰で自転車をとめ信号が変わるのを待つ

ハンドルを持つ手に全体重を預け俯いた

制服に汗が滲む

体にまとわりつく熱気

狂ったように鳴く蝉の声が耳を刺激する

こめかみを伝った汗が地面にポツリと落ちた

それを合図に広がるわたしの後悔

きつとなんとかなるだろうという根拠のない

曖昧な自信

集中力がなく努力ができない自分

同じスタートラインに立っていたはずなのに
気がつくとき追いつかざれ置いていかれている現状

信号が青になりわたしは怠惰に自転車漕ぎ始める
風を浴びたくて空を見上げた

蝉の声はびたりと止み空に桃色の雲が薄く広がっていた
一日の終わりを告げる穏やかな空

美しい世界に気づくことができる自分に喜んだ

周りに置いていかれたとしても自分のペースで
少しずつ進もう

全速力で長く走り続けることは難しい

立ち止まってしまった人の背中を

そっと押せるような人間になりたい

曖昧な自信を前向きな感情に底上げするためには

いつも努力が必要なのだ

ずっと心の底ではわかっていた

目を背けることなく現実と向き合うことで見えてくる

自分がある

わたしは「よし」と声を出してペダルを強く踏み
立ち漕ぎで帰途についた

けんみん文化祭ひろしま実行委員会会長賞

お兄ちゃん

海田町立海田小学校三年 北島 彩羽

お兄ちゃん 遊ぼ

やだ あとでね

お兄ちゃん 勉強おしえてよ

やだ 自分でやりなさい

お兄ちゃん 一緒におふる入ろ

やだ

お兄ちゃん 一緒にねよう

やだ ぬいぐるみと ねて

お兄ちゃん いつから

やだやだまんに なっちゃったの？

やだやだまんのお兄ちゃんなんて 大きらい

でも 勉強しようと思って ノートを開いたら
次の日 書いてあったよ
今日は 一緒にねようねって

やった〜

やっぱり お兄ちゃん 大好き

シヤキ シヤキ シヤキ
シヤキ シヤキ シヤキ
シヤキ シヤキ シヤキ
シヤキ シヤキ シヤキ
俺に切れない相手はいない
シヤキ

広島市議会議長賞

しらなみごころ

広島市立千田小学校五年 橋本 知春

わたしは うみでできる

しらなみです

ふねがとおると

じゃぶん じゃばん

じゃぶん じゃばんと

海水を

ゆらして ゆらして

ゆらしまくって すごしてます

わたしのともだちは

どうろでできる

しらなみちゃん

わたしは大きな音で

じゃぶん じゃばん

じゃぶん じゃばんと

いうけれど

どうろでできる

しらなみちゃんは
ばしゃつと
それほど大きくない音

かわいすぎる
アイドルのような音をかなでる
どうろでできる
しらなみちゃんに あこがれる

どうろでできる
しらなみちゃんは
しごとがあんまりないからね
らくなんだと思っただよ

晴れの日とくもりの日は
どうしてるんだと
かんがえた

台風十号きたつぎの日に
きいたんだ

晴れの日とくもりの日は

ひますぎて たいくつ
しかも
車の少ないところはね
しごとがないって言ってたの

そんなのわたしは
ぜったい ぜったい ありえない

わたしは
まいにち まいにち
いそがしくって
ずっとずっと しごとなの

それでもわたしは
しごとがね すきだから

やっぱり
いまのままがいい

現 代 詩 部 門

広島市教育委員会賞

コレクシヨン

僕は筆記具として生まれてきた。

静寂の中に一つの足音。自分が手に取られる。しばらくして箱を開けられ、眩しい光が差し込む。これから使われるんだな。そう思った矢先、大きいガラス製のケースの中へ入れられた。一度のノックもなしに。

ケースの中には、僕と容姿がよく似た色違いが数本いる。みんな、死んだ目をしている。希望を失った人のように。

目の前のデスクで、人がカメラに向かって喋り始めた。そのうち、僕たちにカメラが向けられ、紹介？をしているのだろうか、鼻を高くして喋っている。

「これを持っている人はすごい。」
なんて言葉も聞こえてきた。

福山市立城東中学校二年 尾崎 光雄

そうか、僕を含めたみんなは、飾られるために、人に自慢するために生まれてきたんだ。
「筆記具」として。

公益財団法人ひろしま文化振興財団理事長賞

きつとできる

できるかな できないかな
それより こわい

できるかな できないかな
できそうな気もする でも一歩が

どうして できるんだ
手をついた とんだ 次の台にとび乗った
はやくて 次々にくり出される技 技

できるかな やりたいな
上手な人の技をコマ送り
地面をけって 手をついたら つき放すんだ
体を曲げちゃいけないんだ……

頭の中で再生ビデオのコマ送り
頭の中で練習する

呉市立蒲刈小学校五年 濱下莉杏良

何度も 何度も コマ送り

やりたい やりたい

できるぞ できるぞ

自分を信じて…

こわいを消して

できる できる

きつと できる

タッタッ トン

ジャンプ ポン

キレ者

福山市立城東中学校二年 吉岡 凜珊

私はキレやすい
だって
切れやすいから

チヨキチヨキチヨキ
今日はいっぱいキレた
みんな
私を使ってキレさせようとする
でも

切るのは得意だし楽しい
働く時間が終わるのは嫌
ふたをされるから

今日の仕事はもう終わり
明日また

あいつ

ぼくの先祖はエライんだ！

時にはどこかの殿さまに

時にはキレイな絵巻物を

あんなにでっかい大仏に

目を入れたのも

誰もが憧れる

ぼくのじいちゃんだ

これはぼくのほこりである

そしてぼくもじいちゃんのまねをして

かっこいい人生をたどるんだ！

たどるはずだったけど

あいつのせいで・・・

ぼくは一週間に二度くらいに使われる

他は全部あいつが

あたりまえのように使われている

あいつの先はかたくてまるくなる

それにたまたま折れて使えなくなる

福山市立城東中学校二年 山岡 千紘

それに比べてこのぼくは
折れることなくしなやかに舞い
すばらしい字をかけるのに
悔しい

とにかく悔しい
ぼくがあいつに負けるはずがない
いつか、あいつをこえてやる
いや、今日でもこえられる
だって

ぼくは

誰よりもだんぜん

エライんだから！

夏

県立広島皆実高等学校三年 成藤 万葉

誰かが夏に向かって私の背を押した

振り返ると街路樹から声が聞こえた

ああ 蝉が鳴いている

彼らは泣き虫だ

樹の下を歩くと彼らの嘆きが降ってくる

昼夜の区別なく声を振るう彼らは何をそんなに

泣くことがあるのだろう

やすらかに土の中で眠っていた子供時代であったのに

目を閉じると街路樹の匂いがした

ああ 濃い緑の香りがする

彼らは夢想家だ

太い幹は大きな野望の現れなのだ

太陽を手に入れようと枝を伸ばす彼らは何をそんなに

意地になっているのだろう

きつと何も得られはしないのに

目を開けると痛かった

ああ 眩しすぎる太陽の光が容赦なく差す

彼は能天気だ

猛り狂う地上の熱気を怠惰に眺めている

満ち足りた表情の彼は何をそんなに喜んでいるのだろう

いつまでもそれは続きはしないのに

誰かが夏に向かって私を急かす

日差しは容赦なく私に触れる

嘆き悲しむそれを指先で優しくつまむ

風が葉を揺らしふと気づく

私は泣き虫な彼らのように腹の底から声を上げたことなどないことに

その慟哭に

その香りに

その痛み

目を瞑ってやる

夏の姦しさも

煩わしさも

眩しさも

すべて美しい命の色なのだから

気高いその色彩はすべて

燃え尽きるまでは彼らのものなのだ

現 代 詩 部 門

友だち

友だちに

「一番の友だち」って

言われるのはうれしいけど

友だちに

自分から順番はつけない

みんな

友だちやから

福山市立駅家小学校六年 中嶋 蒼太

現 代 詩 部 門

音色

福山市立向丘中学校二年 宮脇 千歳

体育館に響くふえの音
僕は汗ながし 心を焦らせる
ボールが天井に届きそうだ
きれいな橋をかけながら
ボールは橋を渡りきる
もう一度
今度は落ちた
僕は全力で反対へと足を走らせる
頭の中をからにして
無我夢中で走り続ける
ボールが僕の元へ
力強く跳び 僕はゴールへの橋をかける
スパッ
その音と同時に機械が終了の合図をしらせる
審判が三本の指をふりおろす
僕はあふれそうなみだをこらえながら
満面の笑みをうかべた

現 代 詩 部 門

黒く染まつた筆箱

廿日市市立野坂中学校二年 豊浦眞二郎

忘れもしない

国語の授業でボールペンを使おうとしたとき

インクがこぼれた

忘れもしない

半紙で一生懸命ふいた

忘れもしない

ふいてもふいても

インクは広がっていくようだった

それはまるで人の裏の顔のようだった。

現 代 詩 部 門

コンタクトレンズ

あこがれだったコンタクトレンズ
めがねくん お疲れ様
コンタクトくん よろしくね

目につけるだけだから簡単よ
と言われても
でも怖い
上手く入らない
時間がかかる
指が近づくと怖い
目をとっさにつむる
まばたきをする
なかなか目に入らない
時間がかかる
嫌になる
でもつけない

福山市立城北中学校三年 新田 暁

やっとの思いで目についたコンタクトレンズ

視野が明るい

まわりまですごくよく見える

みんなこんなに明るい世界

みんなこんなによく見えていたの

明るい世界

右左上下まわりまで

すごくよく見えて嬉しい

良かった

このコンタクトレンズで

世界を見ていこう

これからの未来を見ていこう

明るい世界になるように

僕らがしっかり見ていこう

一般の部

入賞

広島県知事賞

サカナの神様

昨夜残したサカナの、骨に
そっくりの形をしたあなたと出逢ったのは
深い ふかあい 海の底

つまむと粉々に砕けそうで
だからどんなに注意深く暮らしたことか
あなた、覚えているか？

メガヘルツのさきつぼで
ちらつちらつと光って魅せた
震えながらも知らせてくれた
「ここにいるよ」の確かな鼓動

安芸郡坂町 石口 阿希

まもなくあなたには
巨大な眼球が生えてきて
朝に夕にぎよろつとこちらを見据えた
ますますわたしはそおつと
息をひそめた

やがて身が付きサカナは泳ぐ
ピチャッピチャッ
わたしの体内を堂々と陣取り
ぐるりんと回転する肉体を得た

うごく、たたく、
蹴とばす、おどる、

あの晩残したサカナの骨は
この世でいのちを再生した
わたしの子宮を選んでくれた

その日その時は水風船
ばとうーん どうるん どどどっぴよぶっ

「ふんねーい ふんねーえい」

て あなた、控えめに泣いたのよ

胸に置かれた灼熱の
ほんの2452グラムの
金塊のごとく重きかな！

この歎びを果たしてあなた、
なんと表現できようか！
なんと表現できようか！

空気に満ちたこの場所は
広い ひろおい 海のそと
サカナは鳥になりいつか羽搏く
あなたはわたしのもとを、去る

ぎゅっと抱きしめる
ぎゅうつとなお、力いっぱい抱きしめる
もはやあなたは壊れない
もはやあなたは壊れない

サカナの神様、叶うならもう少しだけ
このぬくもりに埋もれさせてください

どうかもう、
少しだけ——

広島県議会議長賞

千人針

庄原市 奥井 久子

「あつ これは 千人針」
庭木の間の草をとり進んでいると

ホッ ホッ ホッ ホッ

小豆粒くらいの朱い実が

土の上に放射線上に散っている

遠い昔の忘れ去っていた記憶

黄なりの木綿の布に赤い糸の玉結び

出征兵士の無事帰還を願って

女の人が一人一針 寅年の女の人は百針

あの千人針が 土の上に

弘三兄ちゃん（父の弟）に令状が来た

病弱の父に代わって

いつも支えてくれた弘三兄ちゃん

明るい笑顔だった祖母から笑顔が消えた

朝起きると祖母はいなかった

「ばあちゃん大丈夫かなあ リユウマチあるのに
千人針もらいに 行かれたよ」

母が言った

次の日も 次の日も その次の日も

祖母は出かけた

日が暮れるまで帰って来ない祖母
疲れきって帰ってきてても

目だけ光っていた

峠を越えてとなりの村までも

夜の暗いジャバラをつけた電灯の下

小さい手で わたしも千人針

母に助けられ玉結びをつける

わたしは寅年

百個もできるんだから

人指し指に赤い糸を巻きつけ

親指でずらし 丸める ひっぱる

縫いつける

何日かの夜を重ねて

百個できた

千人針を腰に巻きつけて
弘三兄ちゃんは出征していった

けれども帰っては来なかった

「仏領インド支那にて名譽の戦死」

小さな箱には紙切れ一枚

祖母は 何日も 何年も涙した

「千人針握ってジャングルの中を……」
そう言っては涙した祖母

『生きて帰るな 命は国のため奉げよ』の時代
生きて帰ってほしい

母の子に対する血の出るような心の叫び
それが千人針だったのだ

蟬の穴を数えながら 草を取り進む

今も続く戦争

戦場からの叫び声が聞こえたような気がした

七十九年目の八月六日が来る

現 代 詩 部 門

広島県教育委員会賞

山の畑で

世羅郡世羅町 高本 澄江

あれは確か

小学五年生の八月六日のことだった

そうだ、平和学習ということだ

全校登校日だったのだ

木造の講堂に全校児童集まって黙禱をした

その後 校長先生のお話を聞いたのだ

テレビも無く 新聞も読まない

十歳の夏だったのだ

「お父さんどうして大人は戦争はいやじゃ

止めてくれ。と言わんかったんじゃろう」

それまで板の間で昼寝をしていた父が

「バカか、知りもせんくせに偉そうな事を言うな。

戦争はいやじゃ?! 止めてくれじゃ!!

フン、言うとつたら、わしはここに居らん。

お母さんも居らん。お前もじゃ。」

「知りもせんくせに生意気な口きくな。」

「自由だ、民主主義だ。そんなものは、どこにあった!!
わしは知らん!!」

「生意気な口きくな。」

再び横に向いて昼寝を続けた父の背中に
深い傷跡があった

「兵隊さんに行つとちやつた時の傷じゃ
黙つとりんさい。」

母はおろおろとして言った

それまでも父は苦手だった私は

さらに父の側には寄りなくなつた

いつだったんだろう

特別高等警察のことを知つたのは

みんな黙つて戦争に協力荷担したんだ

従順さを装いつつ 腹の中で

「いやじゃいやじゃ。戦争を止めてくれ
と叫んでいたんだ

「何も知らんくせに生意気な口きくな」

今もあの時の父の顔が声が甦つてくる

「今のお前に何が出来る」

「やって見せる。」

父が怒りつつせせら笑っている

何でも自由に言え 発信も出来る今

私は何も出来ずに黙っている

戦争は止めろ 世界に平和を

爆撃は止めろ 多くの市民を殺すな

核は作るな 使用するな

でも黙っている 多くの言葉は知っていても

何の発信も行動もしない

八十二歳がここに居る

戦中戦後の厳しい農業者生活の中で

五人の子どもを育ててくれた

父の歳 母の歳を越えて

何もしない 出来ない私が生きている

七十九回目の終戦記念日を告げる

町の無線放送が

一分間の黙禱を促して

サイレンを吹鳴している

私は山陰かひの畑で掌を合わせ

目を閉じ口を閉じ耳を塞いで
ただ祈っている

現 代 詩 部 門

けんみん文化祭ひろしま実行委員会会長賞

葛

国道脇の歩道を歩く。左手には葛のフェンスが続いている。道路の反対側に並ぶ家と家の間に海が見える。金網を乗り越えて、垂れ下がる葛の葉叢を風が撫でて行く。風の去った先に、ふっと母の微笑む顔が現れて消えた。

丘の斜面を葛が這い登って行く。緩やかにカーブしながら上行するアスファルト道路の、ガード柵の白いパイプの間から、若葉を従えた葛の蔓先が幾つも覗いている。麓の畑で草を取る祖母の記憶が蘇ってくる。

山間の作業小屋の外に、夥しい数の葛の葉に覆われて、墳墓のように盛り上がった場所がある。濃緑色の闇の中に、鉄骨混じりのコンクリート塊や廃材や、錆びた機械部品等が埋もれている。森で働く父の気配がする。

三原市 長光 祐三

ネムノキが葛に取り付かれている。天辺まで覆い尽くした葛の葉は、隣のモチノキにまで広がる勢いだ。あちこちの葉陰から、長い花茎が斜めに突き出し、赤紫色の花を咲かせている。嫁いだ姉の着物の柄のようだ。

中低木をがんじ搦めに緊縛して、河川敷を葛が制圧している。運動場よりも広くてぶ厚い緑の絨毯の下で、植物群落がじっと息を潜めている。滴り落ちて来る僅かな光を測定しているのは、農業技師だった兄だろうか。

葛の茂みの中には、ゾウムシやカメムシや、クズノチビタマムシなど、いろんな虫がいる。バツタが飛び跳ね、暗い地面をへびやムカデが這っている。ネコが走り込み、イヌが鼻を突っ込む。時には私もいる。

海辺の廃工場の破れたトタン塀の下から、地面を匍匐し侵入して来る葛の蔓。採石場跡の廃電柱に、枯れた葛の葉が大きな塊を作り、

風に吹かれてカサカサ音を立てていることもある。いつか飛び去って行った、鳥の家族の巣跡のように。

現 代 詩 部 門

広島市長賞

じいじの森林は生きている

ぼくは、おじいちゃんのまねをして、どんぐりの木を「ぎゅ」とだきしめてはおずりしました。しばらく、そうしていると、どんぐりの木が、こういいました。

「えいせい、おじいさんのオニヤンマにはもう会えたか」

ぼくがくびをふると、どんぐりの木はこうおしえてくれました。

「あっちの小川の池のそばで、おじいさんのオニヤンマが生まれたぞ。もう、えいせいの家に向かって飛んでいるころだろうさ」

ぼくは、とてもうれしくなり、はやく家に帰りたくなりました。

「どんぐりの神さま、ありがとう」

そういうと、ぼくは力いっぱい山道を走りはじめました。トトは、どんぐりの木のまわりをひとまわりすると、すぐに、ぼくのうし

廿日市市 山田 宣昭

ろを走りはじめました。

木立をぬけて、森林もりの小道をたどり、森林もりの出口までくると、午後の日差しを真つ赤にそめて赤とんぼの群れが空いっぱい飛んでいました。そのなかに、ぼくは黒いからだに黄色いしま模様の大きな目をした巨大なオニヤンマを見つけました。オニヤンマはゆうゆうと、ぼくにちかよってきました。

「じいじ」

と、ぼくは声をかけました。オニヤンマはぼくの顔のまんままできました。けれどもなにもいいませんでした。

「どんぐりの神さまにあつたよ。ぎゅと抱いたよ。じいじがしていたように」

そう、ぼくはいいました。

じいじのオニヤンマは大きな目玉をくるくるまわしました。

トトがしつぽをふっています。

ぼくは、うれしくてなんともなんともうなづきました。

そのとき、坂の下の家から声がありました。

「おーい。えいせいやーい」

おばあちゃんの声でした。

オニヤンマは、赤とんぼの群れの中に飛んでいきました。

その夜、ぼくは、おとうさんとおかあさんといっしょに星空をみていました。星はふるようにかがやいています。ぼくは、どんぐりの神さまのこと、じいじのオニヤンマのことをはなしました。おとうさんが、ぼくにこういいました。

「空の星もみんな生きている。森林もりもトンボもずっとずっと大昔からここにいる。トンボの祖先はなんでも2億年もまえから、この地球にいるんだそうさ。だから、また、来年もオニヤンマは、あの池のほとりの水の中で育って、こんどの夏も、また飛んでくるさ」

夏休みの終りの日、ぼくは、東京に帰った。帰りの車の中で、おばあちゃんのくれたおべんとうをあけると、おばあちゃんの手の大きさのおにぎりといっしょに、細長い茶色のどんぐりの実がひとつはいつていた。

現 代 詩 部 門

広島市議会議長賞

ドルフィン・セツシヨン

東広島市 高橋 克知

夏の昼過ぎ 公園の噴水前で
若い画家が通行人にお辞儀をすると
隣のキーボード奏者の演奏にあわせて
ライブペイントをはじめた

強い日差しにひたいをぬぐいながら
白いキャンバスいちめんを
インディゴブルーで塗りつぶし
昏い 昏い 海の底を描いた
土星の白い環があらわれた

潮鳴りのような
即興演奏のすきまから
なにを見つけたのだろう
画家はキャンバスを横に倒した
白い環からイルカの群れが躍り出た

空色のリネンシャツ

波色にひるがえるスカート

海岸を歩いていたのは誰？

目を閉じて思い浮かべていると

白い砂の譜面に 風が流れて

貝殻の旋律がきこえた

遠い日に 青くまたたく輪唱へ

光るイルカたちを描いていく

全身全霊で描いていく

何度目かの噴水が ぽーんと

セピオライトの積雲へ打ち上がった

いつしか ふたりの周囲には

イルカのひとだかりができていた

作業着のイルカがふたりの前にくると

ポケットから文庫本を取り出し

演奏にあわせて

イルカの言葉で朗読をはじめた

広島市教育委員会賞

黄色い花とトウモロコシと

五年生の時

教室の机は 二つずつくつつけて並んでいた

横の席にはだれかが座った

女の子はなにも持っていないなかったから

教科書は真ん中に置いて開いた

チューリップがいっぱい咲いていた

黄色く咲きかけた花を指さして

これきれいと言った

順番に黒板の前に立つように言われて

漢字や算数を書いた

女の子はいくら叱られても

分数が解けなかった

先生は汚れた髪の毛の端をつまんで

風呂に入って来るようにと言った

身体も臭いし 服も と付け足した

女の子は 隣の席に戻って来て

黄色いチューリップを指でなぞっていた

広島市 正本 忠臣

大きな街に仕事に行った

通りにはたくさんの方が行き交っていた
すれ違う人達の中に 若い女の人がい
しゃがんで 道に落ちていたものを拾った

両端を持って嘔んだけれど
すぐに吐き出して捨てた

トウモロコシの食べかすで

白くて 実みは一粒もついていなかった

振り返って その人を追いかけた

追い着くと

長い髪は汚れてばさばさしている

褪あせたブラウスにスカートの裾すそは傷んでいた

自分が何がしたいのか分からなかった

立ち止まると その人はすぐ遠離り

人混みの中に紛れた

もう疲れたので 一人で席を立て外に出た

狭い踊り場に 店の女の人が追って来て

カウンターの花瓶に挿してあった

黄色い花を手渡してくれた

エレベーターのボタンも押してくれた

賑やかな通りを横切って歩くと

灯りが途切れた先に川がある

長い橋を渡りかけて

歩き疲れて 欄干に両肘をついて休んだ

川は暗くて 川底は見えなかった

でも 対岸の建物の赤や青のネオンが

縮模様になって細く連なり

川底に届いていた

女の人が歩いて来て

欄干に両手を置いて 並んで川を眺めていた

しばらく黙ってそうしていた

狭い踊り場で手渡して貰った黄色い花を

女の人に渡して橋を渡った

隣の席に座った女の子とも

なんの話もしなかった

女の子はそのまま学校に来なくなったから

それからは教科書は自分の前で開いた

隣の席は今も空いたまま

もうあまりにも遠くなり過ぎて

分からなくなってしまうた

現 代 詩 部 門

公益財団法人ひろしま文化振興財団理事長賞

二〇二三年の油蟬

二〇二三年の夏

赫赫たる太陽

突き刺さる日射

地に乱舞する葉の影

朝、職場に向かう

自転車にまたがった

ふと気づく

前輪の横

一匹の油蟬が裏返っている

蝉嵐の中

私の心の中に

真夜中の川のような

深い静寂が流れゆく

その死の間際を想った

死に抵抗を続ける生存本能

薄暮のように淡い最後の鳴き声

最後の力を振り絞って地面をたたく羽

広島市 吉武 渉

何かをつかもうと動き続ける脚
透明な呼吸を重ねる腹

地球のように丸いその双眸に
最後に映ったのは

地上か

それとも

天空か

その沈黙に耳を傾けよう

二〇二三年は

G7広島サミットが開催された

世界の首脳が広島を訪れた

慰霊碑に花を捧げ

首を垂れて

死者を祈った

原爆投下から七十八年

何十万人の死

魔の弾は

肉を燃やし

骨に食い入った

慰霊碑の石室 原爆死没者名簿

公園の北西

原爆供養塔 七万人の身元不明者の遺骨

骨 骨 骨 骨 骨 骨 骨 骨

頭蓋骨 鎖骨 肋骨 骨盤 大腿骨

骨だけ残し

亡くなっていた被爆者たち

真夜中の川のような

深い静寂が流れゆく

地球のように丸い双眸に

最後に映ったのは何だったのだろう

その心に

最後に宿った思いは何だったのだろう

その沈黙に耳を傾けよう

現 代 詩 部 門

石

君の石ってどんな石？

よかったら僕に見せて欲しい

僕のはこの石みどり色

形はちよつと丸っこい

石には種類が沢山あるけれど

君の石が見てみたい

恥ずかしい？

大丈夫、前に出すだけでいいよ

キラキラの宝石じゃなくていいんだ

どんな石もそれぞれの良さがある

石ってすごいよ？

どんなに壊れたって無くならない

形を変えて集まって違うものになるんだ

だけど気を付けて

自分の石に色を塗り、無理やり削って尖らせて

すごいでしょ？ っていう人がいる

廿日市市 長代 明樹

いきなり蹴っ飛ばす人だっている
だから絶対自分の石は離さないで
相手の石に興味がないなら
君にとつてそれはただの石つころ
もしも見せたいと思つたら
そつと見せるだけでいい
そしたらきつと伝わるから
持つてない？
大丈夫、見えにくいだけ
小さかったり、透明な人もいる
すぐには難しくても
いつの日か見せてほしい
きつときれいだから

わたしの伯父のはなし

安芸郡海田町 竹野内康子

八月五日午後二時

私の歩いているのは

ひろしま

夏の色彩にあふれ

人たちの行き交う

おだやかで

にぎやかな街

忍び寄るものに

気づくわけない

七十九年前のその日

青い空の下の

ありふれた日常

before and after

一九四五年八月六日午前八時十五分

閃光とともに
途切れた時間
吹き飛ばされた命
焼かれた街の記憶

日常を一瞬で奪うもの
風景を地獄図に変えるもの
無垢の命を汚染するもの
七十九年後のいまも
苦しみ続けさせるもの
過去が未来となった
その日を想う

一九四五年八月六日八時十五分
伯父は職域国民義勇隊として
県庁近くで建物疎開の作業中
一瞬の光に焼かれ
人生を語り伝える骨もない

県北の農家の六人兄弟の一番上
一（はじめ）と名付けられたその人は
義眼の二十代の銀行員

弟二人は海と陸で戦死して
写真入りで新聞に載った
母と妻と幼い子どもと
残る三人の弟は
想いを堪えて戦後を生きた

before and after

一九四五年八月六日午前八時十五分

静かな故郷の山の上、
生きた証の墓標を立て
何年もの間
家族は骨を探し
思い出を語り合う
そのうち、
それぞれ年老いて
天に召されてなお
その人を探し漂う
ひろしまの空

現 代 詩 部 門

風とケダモノ

下手くそだから
風を抱きしめている
くるしい場所から
私を拐った
しずかな風を
恋人のようだとおもって
抱きしめている
いつのことだったか
オレンジの水彩絵の具が降る画面の中
私と風は手をつないで
いつそう顔を赤らめながら
一緒に家に帰った
そのことを
思い出せないけど
とてもよく覚えていて
そのときから
ほんとうは

大分県大分市
エキノコックス

家は安心できる場所なのだと知った
いつもの二倍 かなしい夜は
いつもの二倍 風を抱きしめよう
私は下手くそだったから
下手くそなりに生きることを選んだ
見つめ合うと
風と私は
いっそう顔を赤らめる
ケダモノは
醜いとおもっていた
安いベッドが軋む夜
私は
ひとつのケダモノとして
風を抱きしめている

川
柳

選
者

(小・中学生の部)

山
本
恵
子

(高校生・一般の部)

弘
兼
秀
子
常
國
喜
好

小・中学生の部

入賞

広島県知事賞

ずっと友そういいつつもけんかする

大竹市立小方小学校五年 山田 怜奈

広島県議会議長賞

友だちと今日はライバルまけないよ

廿日市市立佐方小学校三年 常見真理子

広島県教育委員会賞

友とはね人だけじゃない本もだよ

大竹市立大竹小学校四年 森川 航

けんみん文化祭ひろしま実行委員会会長賞

けんかした次の日会うのきままずいな

廿日市市立佐方小学校六年 登 千聡

広島市長賞

一年生初めて友をつくれたよ

大竹市立小方小学校六年 尾上 令

広島市議会議長賞

言っちゃったなみだがポツリ流れ出す

大竹市立小方小学校六年 河村 優花

広島市教育委員会賞

友達がせ中をおしてくれるんだ

大竹市立小方小学校六年 三浦 煌峨

公益財団法人ひろしま文化振興財団理事長賞

友達とタイムカプセル開けてみる

廿日市市立佐方小学校六年 津江 藍人

題「友」 山本 恵子 選

特
選

ずっと友そういつつもけんかする

大竹市立小方小学校五年 山田 怜奈

【評】言いたいことを言い合える事こそ友達の証しです。それで衝突することがあってもそこから生まれる絆を信じて。

友だちと今日はライバルまけないよ

甘日市市立佐方小学校三年 常見真理子

【評】同じ峰を目指せば自ずとライバルにもなる仲間です。互いの切磋琢磨で力がついていくもの。ライバルは自分。

友とはね人だけじゃない本もだよ

大竹市立大竹小学校四年 森川 航

【評】千二百を越す投句者の中で「本」が友としたのはこの句だけ——。良い処に目をつけられた。本から無限の世界へ。

けんかした次の日会うのきままずいな

廿日市市立佐方小学校六年 登 千聡

【評】 本心を言い合うからけんかにもなる。気まずさから逃げずに向い合えばより強い絆も生まれるかもしれない。信じてみよう。

一年生初めて友をつくれたよ

大竹市立小方小学校六年 尾上 令

【評】 ドキドキの新生生の姿が目には浮かぶ。友達百人作れと大人は言うけれど、簡単ではない。一人の友が出来て良かったね。

言っちゃったなみだがポツリ流れ出す

大竹市立小方小学校六年 河村 優花

友達がせ中をおしてくれるんだ

大竹市立小方小学校六年 三浦 煌峨

友達とタイムカプセル開けてみる

廿日市市立佐方小学校六年 津江 藍人

ともだちを元気にさせるおまじない

廿日市市立佐方小学校二年 伊藤 なつ

落ちこむとそつとよりそう友がいる

廿日市市立佐方小学校五年 松本あさひ

引っこした友の手紙が温かい

廿日市市立佐方小学校六年 水津 美咲

友達の心にひびくアドバイス

大竹市立大竹小学校五年 玉のい詩音

友だちを守りたいから強くなる

大竹市立小方小学校四年 竹内ろくろう

ケンカしたもやもやするなあやまろう

大竹市立小方小学校四年 入山 奈未

友達にごめんね言えず引っこした

大竹市立小方小学校五年 藤本 庸介

約束をやぶらぬ友は本物だ

大竹市立小方小学校五年 濱田 壮汰

友だちのよろこぶ顔にほっとする

大竹市立小方小学校五年 海井明香里

親友と見上げる空は別格だ

廿日市市立佐方小学校六年 極楽寺悠大

大親友ときどきケンカ後かいだ

廿日市市立佐方小学校六年 野原 碧衣

友だちがひとりぼっちでかなしそう

廿日市市立佐方小学校三年 茶谷 紗良

ともだちに手がみをおくるとどくかな

廿日市市立佐方小学校二年 西村 珠奈

友だちはこまった時の救世主

廿日市市立佐方小学校五年 谷平ほたる

努力してぬいていく友あこがれる

廿日市市立佐方小学校五年 水川 ゆな

友だちもいっしょにかんどうえい画かん

廿日市市立佐方小学校四年 八木 彩乃

友だちが一人いるだけ幸せだ

廿日市市立佐方小学校四年 甲斐 優理

ケンカしていまさら気付く大切さ

廿日市市立佐方小学校六年 能美 奏羽

つらい時話を聞くのはいつも君

廿日市市立佐方小学校六年 丸亀 紗也

友達といつもの坂でまた明日

廿日市市立佐方小学校六年 三宅 咲希

友達が泣いている時泣きそうだ

大竹市立大竹小学校五年 齋藤 旭

けんかしてぼくの心はすつからかん

大竹市立大竹小学校五年 嶋田 光志

けんかする言いすぎちゃったどうしよう

大竹市立大竹小学校五年 榊田 美羽

勇気ある友の行動ほこらしい

大竹市立大竹小学校六年 長部 花音

ともだちとしらないせかい見つけたよ

廿日市市立吉和小学校二年 山崎 璃恩

友だちのバトンをキャッチぼくのばん

廿日市市立吉和小学校三年 佐藤 駿太

なにしてるすこしさみしいあいたいな

庄原市立東小学校二年 中迫 汐

川 柳 部 門

高校生・一般の部

入賞

広島県知事賞

胸を衝く戦禍の街に遠い春

広島市 正山 史明

広島県議会議長賞

公園の碑と碑と碑みな黙禱す

広島市 小西 博子

広島県教育委員会賞

国連で迷子になった白い鳩

尾道市 砂田 達成

けんみん文化祭ひろしま実行委員会会長賞

今が消え遠い昔に生きる父

呉市 野高 善子

広島市長賞

どしゃぶりを歩いた遠い日の靴よ

東広島市 渡辺 典子

広島市議会議長賞

雨のあとがき遠雷を聞きながら

広島市 福田 淳子

広島市教育委員会賞

望郷に聞こえる遠い日の汽笛

広島市 松本壽賀子

公益財団法人ひろしま文化振興財団理事長賞

父の背がいつしか明日の道しるべ

三原市 笹重 耕三

題「遠い」 弘兼 秀子 選

特選

胸を衝く戦禍の街に遠い春

広島市 正山 史明

【評】連日放映される戦禍のニュースは見るに忍びない。終りの見えぬ現状へ、ただただ祈るばかりだ。

今が消え遠い昔に生きる父

呉市 野高 善子

【評】元気で働き者であった父の変化に、とまどう日々だった。今は全てを受け入れ見守っている家族が見える。

どしゃぶりを歩いた遠い日の靴よ

東広島市 渡辺 典子

【評】辛く苦しい時のことを「どしゃぶり」と表現した。共に耐え乗り越えて来た靴を「よ」と称える。

雨のあとがき遠雷を聞きながら

広島市 福田 淳子

【評】 かつてない雷雨の不安な夜が明けた。通り過ぎて尚「遠雷」がその恐ろしさを思い出させている。

望郷に聞こえる遠い日の汽笛

広島市 松本壽賀子

【評】 ふるさとを思う。美しくのどかな風景の中に、心あたたかな人達の姿が浮かんでくる。汽笛もなつかしく響く。

入
選

海ひとつ隔てただけの遠い国

福山市 村田 幸夫

遠まわりあなたに出会うためでした

東広島市 池田久美子

限りなく遠いが亀はあきらめぬ

福山市 石井小魚二

折り合えず妥協の道が遠ざかる

広島市 大杉 綾子

離れても見上げた空は同じ青

広島市 上田 智世

遠花火あの世この世の声と聴く

世羅郡世羅町 高本 澄江

遠い日の想い出抱きする介護

広島市 齋藤千恵美

耳朵に棲む遠いあの日の祭り笛

尾道市 前中 吾一

廃線のふるさとがまた遠くなる

福山市 竹村 丙喜

コンニチワ遠い星から来た曾孫

三原市 吉永 団風

墓掃除遠いあの日も暑い夏

福山市 貝原 辰二

遠ざかる記憶を辿る人生譜

広島市 大杉 卓雄

目標へ遠い位置で躓いてる

広島市 川上 咲良

リハビリのゴールは遠いスケジュール

広島市 岡田 郁枝

満月と結ぶ三角君と僕

呉市 宍戸三喜恵

引き揚げの遠い記憶の敗戦日

廿日市市 粟屋 治

ああ無情遠い本塁無得点

安芸郡府中町 西 和弘

人知れず遠くの海へ泣きに行く

江田島市 住田 照水

手をのばす一人ぼっちの遠い空

広島市 片山 樺菜

憧れを遠く見つめるグラウンド

広島市 河野 祐実

題「自由吟」 常國 喜好 選

特選

公園の碑と碑と碑みな黙禱す

広島市 小西 博子

【評】公園にはたくさんさんの碑が建てられ、各々に謂れと物語があります。いつまでも思いを馳せることは大切なことです。

国連で迷子になった白い鳩

尾道市 砂田 達成

【評】国連は平和と安全の維持を第一の目的として設立されました。国連が本来の力を発揮して平和を実現することはみんなの願いです。

父の背がいつしか明日の道しるべ

三原市 笹重 耕三

【評】憧れの大好きなお父さんです。迷ったとき、悩んだとき、いつも父の背中を見つめ、力強く生きていく姿が浮かびます。

転んでも転んでもまた転んでる

広島市 丸中 あや

【評】 転ぶのは前向きに生きている証です。何回転んでも、前向きに生きていこうとする姿が素敵です。

クロスワード解いて世界の今を知る

庄原市 田邊 典子

程々に忘れて丸く生きている

広島市 有田 澄子

捨てに捨て独りの自由無量大

府中市 田辺 羽子

八十路坂節目と言うがまだやれる

尾道市 川口 靖文

マイペース歩幅はみんな違うから

東広島市 池田久美子

よう来たねえいつもと同じ祖母の声

広島市 河野 祐実

体調が良くてやさしくなる心

広島市 熊谷 純

認知症特效薬は歌と愛

福山市 門田ひとみ

親心知らぬ娘の一人旅

広島市 近末 夕子

生きている今日することを箇条書き

竹原市 古田比呂子

古希過ぎて次は喜寿への夫婦坂

福山市 貝原 辰二

わかつてる単語が出ないもどかしさ

広島市 恩田 陽子

心地良い間合いを保つ趣味仲間

江田島市 住田 照水

娘のために甘える居場所開けておく

広島市 瀬戸れい子

吹っ切れて心の扉あけ放つ

庄原市 安藤 幸江

セルフレジ二人三脚老夫婦

広島市 大江 達美

川底の石にも熱い過去がある

広島市 大杉 卓雄

いま此処に居る仕合せを染めあげる

尾道市 小川 道子

お辞儀する角度で示す好感度

広島市 大杉 綾子

新しい世界が見える遍路笠

福山市 瀬尾まもる

作品募集要項

■趣旨

文芸に親しむ人々から広く作品を募集し、発表、交流の機会を設けることで、文芸への理解を深め、広島県の文化を高める祭典とします。また、表彰式・分野会を行います。

■主催

けんみん文化祭ひろしま実行委員会、公益財団法人ひろしま文化振興財団

■事業内容

応募のあった作品について審査を行い、入賞作品等を決定し、表彰します。
※入賞・入選された方には、大会1か月前頃に通知します。

■応募締切

令和6(2024)年9月5日(木) 必着

■応募資格

広島県内に在住している人、通勤、通学している人及び広島県出身者

■応募先・問い合わせ先

【郵送】

〒730-0051 広島市中区大手町一丁目5-3 広島県民文化センター内
公益財団法人ひろしま文化振興財団

■賞

短歌、俳句、現代詩、川柳の分野ごとに広島県知事賞・広島県議会議長賞・広島県教育委員会賞・けんみん文化祭ひろしま実行委員会会長賞等を授与します。

■表彰式・分野会

日時：令和6(2024)年12月8日(日) 午後1時00分
場所：広島県民文化センター（広島市中区大手町一丁目5-3）

■作品集

短歌、俳句、現代詩、川柳の入賞作品等を掲載した作品集を刊行し、表彰式会場にて無料配布しますが、郵送を希望される場合は、郵便番号・住所・氏名を明記し、215円切手を貼付した角5（横19㍍×縦24㍍）以上の返信用封筒を応募先に郵送してください。

なお、応募された作品の著作権は、けんみん文化祭ひろしま実行委員会に帰属します。※全応募作品を掲載した作品集は作成しません。

短歌 応募規定

●募集区分

一般の部 小・中・高校生の部

●作品

未発表作品とし、一人一首とします。（応募作品はお返ししません。）

●応募方法

所定の応募用紙に黒のペンかボールペンで、**楷書**で必要事項を記入のうえ、応募してください。

●その他

応募規定に違反する場合及び盗用・類似作品と認められた作品は、入賞等を取り消します。

共 催： 広島県歌人協会

俳句 応募規定

●募集区分

一般の部 小・中・高校生の部

●作品

未発表作品とし、一人一句とします。（応募作品はお返ししません。）

●応募方法

所定の応募用紙に黒のペンかボールペンで、**楷書**で必要事項を記入のうえ、応募してください。

●その他

応募規定に違反する場合及び盗用・類句と認められた作品は、入賞等を取り消します。

共 催：(公社)日本伝統俳句協会 (公社)俳人協会広島県支部 広島県現代俳句協会

現代詩 応募規定

●募集区分

一般の部 小・中・高校生の部

●作品

未発表作品とし、一人一編とします。（応募作品はお返ししません。）

●応募方法

所定の応募用紙、または原稿用紙に黒のペンかボールペンで、**楷書**で必要事項を記入のうえ、応募してください。本文は、原稿用紙3枚以内とします。

●その他

同一作品及び類似作品による他の文芸事業への重複応募はお断りします。応募規定に違反する場合は、入賞等を取り消します。

共 催： 広島県詩人協会

川柳 応募規定

●募集区分

高校生・一般の部 小・中学生の部

●作品

未発表作品とし、一人各題二句詠とします。（応募作品はお返ししません）

●応募方法

所定の応募用紙に黒のペンかボールペンで、**楷書**で必要事項を記入のうえ、応募してください。

●その他

応募規定に違反する場合及び盗用・暗号句と認められた作品は、入賞等を取り消します。

共 催： 広島県川柳協会

けんみん文化祭ひろしま'24 文芸祭 応募状況

地区	市町	短歌		俳句		現代詩		川柳	
		一般	小・中・高	一般	小・中・高	一般	小・中・高	高校・一般	小・中
広島	広島市	93	334	137	523	18	8	111	3
西部	大竹市	1	16	1	319	0	11	0	617
	廿日市市	6	14	10	611	4	128	5	533
呉・安芸	呉市	16	297	17	290	3	6	23	4
	江田島市	1	0	10	0	1	0	3	0
	府中町	1	0	7	859	0	0	5	0
	海田町	0	42	0	415	1	57	0	0
	熊野町	0	0	0	0	0	7	2	0
	坂町	2	0	2	244	2	0	2	0
東広島	東広島市	8	21	13	21	2	16	17	1
芸北	安芸高田市	4	15	3	48	0	0	1	1
	安芸太田町	1	0	7	0	0	0	0	0
	北広島町	1	0	0	37	0	0	0	0
尾三	竹原市	2	0	5	0	0	0	10	0
	三原市	6	284	3	314	4	0	7	0
	尾道市	9	182	14	150	4	0	14	0
	大崎上島町	1	0	2	0	0	0	1	0
	世羅町	3	0	0	0	3	0	7	5
福山	福山市	17	251	48	581	1	162	27	1
	府中市	0	0	5	32	1	0	9	0
	神石高原町	0	0	0	0	0	0	0	0
備北	三次市	10	290	13	44	2	0	7	0
	庄原市	8	87	8	130	3	6	10	52
県内小計		190	1,833	305	4,618	49	401	261	1,217
県外		0	0	1	0	1	0	2	0
合計		190	1,833	306	4,618	50	401	263	1,217

けんみん文化祭ひろしま'24 文芸祭 大会記録

- 【開催日】 令和6年12月8日（日）
- 【場所】 広島県民文化センター
- 【主催】 けんみん文化祭ひろしま実行委員会、公益財団法人ひろしま文化振興財団
- 【共催】 広島県歌人協会、(公社)日本伝統俳句協会、(公社)俳人協会広島県支部、広島県現代俳句協会、広島県詩人協会、広島県川柳協会

【プログラム】（予定）

- 表彰式（13：00～13：30）
入賞作品の発表・表彰式 等

- 分野会（13：45～15：00）
 - 短歌
各選者による講評 等
 - 俳句
各選者による講評 等
 - 現代詩
入選者の表彰、各選者による講評、入賞・入選者による作品の朗読 等
 - 川柳
各選者による講評 等

けんみん文化祭ひろしま'24 文芸祭 合同作品集

編集・発行 令和6年12月

けんみん文化祭ひろしま実行委員会
〒730-8511 広島市中区基町10-52
広島県環境県民局文化芸術課内
TEL(082)513-2722

公益財団法人ひろしま文化振興財団
〒730-0051 広島市中区大手町1-5-3
広島県民文化センター内
TEL(082)249-8385

印刷 株式会社中本店